

第71回 歴史リレー講座「いのちの古典学」 上野 誠氏 (R2.8.16)

2016年、私は故郷福岡から呼び寄せた母を7年間の介護の末見送りました。この間の体験は人の死に際して古典学者の自分はどう向き合うべきかを考える契機になりました。そして、古典も父母の教えもどちらも同じ、「過去に聞いたこと、読んだもの、体験したことを通じて未来を考える」ということだと気付かされたのです。

生について私たちはまず、いかに健康で長生きするか頭を悩ませます。ところがいずれ訪れる死を前提としたとき、どのように生きるかは、途端に医学的命題から哲学的命題に様変わりします。「生ける者 遂にも死ぬるものにあれば この世にある間は 楽しくをあらな」(人は最後には必ず死ぬ。だからこそ生きている間は楽しく過ごそうじゃないか)。『万葉集』巻三、大伴旅人が太宰府で詠んだ酒をほめる歌です。今を楽しむことが何より大事という姿勢は、生きることへの強い執着心にほかなりません。

今まで私にはいくつかの転機がありました。1979年、両親を説き伏せて東京の大学受験に出発する朝、当時すでに著名な俳人でもあった母は別れの歌を詠んでくれたものです。「受験子の ^{じゅけんし} もう振りむかぬ 距離に母」「子には子の 夢を羽ばたかせて 鳥雲に」。晴れて入学後、大学の食堂でたまたま手にした新聞の俳壇作品のひとつがなかなか面白い。「一流に少し外れて入学す」「そうか、そうか」と作者名に目をやると、なんと私の母。あの朝の感動的な歌とはだいぶ毛色が違いますが、どちらも母の本音なんですね。これらの作品は今では私の宝物です。このような経緯から、私は学生に国文学史の基礎を教える際、必ず母の歌を取り上げることにしています。いかに『万葉集』といえども、そもそもはその時代を生きた人々のつづやきであり、歴史だったこと、なにも有名な人の歴史だけが歴史ではないことを彼らに伝えたいからです。

同じく大伴旅人が詠んだ酒の歌に、宴会で偉そうに説教している人を揶揄した作品があります。「賢^{さか}しみと 物言ふよりは 酒飲みて 酔ひ泣きするし 優りたるらし」(説教する人に比べれば、泣き上戸のほうがまだましだ)。人間の命が有限であるのならば、私たちは今この瞬間を楽しむべきである。この考えは中国の六朝^{りくちよう}時代の詩人、陶淵明^{とうえんめい}を支えていた六朝思想に通じます。自由に生きるための障害になるものをいかに払っていくか。酒があるなら楽しもう、ないのならほかの楽しみを見つくるまでだ。一見、真面目に生きることから逃れているようにも見えますが、これぞ明快な哲学ではないでしょうか。

『万葉集』巻二、「現身^{うつそみ}の 人なる吾れや 明日よりは ^{ふたかみやま} 二上山を ^{いる せ} 弟背と吾が見む」(生きている私にできることはただひとつ、明日からは墓のある二上山を弟と思って見ることだけだ)。謀反の濡れ衣を着せられ処刑された弟の大津皇子を偲んだ大伯皇女の歌です。六朝思想と同じく明確な哲学が見て取れます。お盆に僧侶に経をあげてもらうことも大事ですが、それよりも死者を想い、みんなで語らうことこそ何よりの供養です。その中で死者が蘇るのです。古典は私たちに生きるための指針を与えてくれます。つまりは哲学の屋台骨です。

『古事記』のイザナミノミコトとイザナギノミコトは互いの同意をもって国産み(性交渉)に及び夫婦となりました。その後イザナミは亡くなり、イザナギが黄泉の国まで追いかけていきます。醜く変わった自分の姿を見るなどイザナミが釘を刺したのに、つい盗み見してしまったイザナギ。怒り狂ったイザナミは軍隊をもってイザナギを追い詰めます。死者が二度と戻らないことを説いた「黄泉行神話^{よみここう}」です。人は古典を学ぶことで、生きる智慧、死を受け入れる智慧を身に着けることができます。国産みの話は人間の尊厳に関わる性交の起源でもあります。注目すべきは「互いの同意」という人権思想が見られることです。

どれほど愛し合っていても、いつかは死が二人を分かちます。いつかは憎しみ合うこともあります。愛憎相半ばするなか、いかに生きていくのか。難しい命題ですが、古典に親しむことで人間はやがて迎える死を意識し、その中で何ができるかを考えることができます。どれほど技術が発達しようと、生死が表裏一体であることを説いてくれるのが古典なんです。日本の哲学は独立しているものではなく、古典の中にこそ息づいています。

いのちの古きもの

上野 謙二

(奈良大学文学部国文学科)

はじめに

身体的側面の性／コミュニケーション的側面の性／情報的側面の性／如何に長生きするか(医学的命題)・・・不慮の妊娠をどう避けるか／死をどう受け止めて生きるか(哲学的命題)／性とは何か／生きるとはどういうことか／古代において神話と歌が教えてくれるもの

一、今が大切

生ける者(ひと) 遂にも死ぬる ものにあれば この世にある間は 楽しくをあらな
『万葉集』巻三の三四九

今を楽しむ／一方、それは生への強い執着／今を生きるという教え

大津皇子の屍(かばね)を葛城の二上山(ふたがみやま)に移し葬(はぶ)る時に、大泊皇女の哀傷して作らす歌二首

うつそみの

人なる我(あれ)や

明日よりは

二上山を

弟(いろせ)と我(あ)が見む

この現実世界に生きる

人たるわたしは・・・

明日からは

二上山を

弟として眺めよう(それしかできることはない)

ることはない)

『二首目、左注省略』

『万葉集』巻二の一六五

二、生殖の起源を語る神話

是(こゝ)に、其(そ)の妹(いも)伊邪那美命(いざなみのみこと)を

問ひて曰(い)ひしく、「汝(なむち)が身は、如何(いか)にか成れる」といひしに、答へて曰(まを)ししく、「吾(あ)が身は、成り成りて成り合はぬ処(ところ)一処(ひとところ)在(あ)り」とまをしき。爾(しか)くして、伊邪那岐命(いざなぎのみこと)の詔(のりたま)ひしく、「我(あ)が身は、成り成りて成り(あま)余れる処(ところ)一処(ひとところ)在(あ)り。故(かれ)、此の吾が身の成り余れる処を以(もち)て、汝(なむち)が身の成り合はぬ処を刺(さ)し塞(ふさ)ぎて、国土(くに)を生き成さむと以為(おも)ふ。生むは、奈何(いか)に」とのりたまひしに、伊邪那美命の答へて曰(い)ひしく、「然(しか)、善(よ)し」といひき。爾(しか)くして、伊邪那岐命の詔(のりたま)ひしく、「然(しか)らば、吾(あれ)と汝(なむち)と、是(こ)の天(あめ)の御柱(みはしら)を行き廻(めぐ)り逢(あ)ひて、みとのまぐはひを為(せ)む」とのりたまひき。如此(かく)期(ちぎ)りて、乃(すなは)ち詔(のりたま)ひしく、「汝は、右より廻(めぐ)り逢(あ)ひて、我(あれ)は、左より廻(めぐ)り逢(あ)ひて」とのりたまひき。約(ちぎ)り竟(をは)りて廻(めぐ)り逢(あ)ひし時に、伊邪那美命(いざなみのみこと)の先(ま)づ言(い)はく、「あなにやし、えをとこを」といひ、後(のち)に伊邪那岐命(いざなぎのみこと)の言(い)ひしく、「あなにやし、えをとこを」といひき。各(おのおの)言(い)ひ竟(をは)りし後(のち)に、其(そ)の妹(いも)に告(の)らして曰(い)ひしく、「女人(をみな)の先(ま)づ言(い)ひつるは、良(よ)くあらず」といひき。
『古事記』上巻、伊邪那岐命と伊邪那美命

アダムとイブ(原罪)／イザナキノミコトとイザナミノミコト(問いかけ)／性行為↓マダハヒ(人間にも用いる)／目(ま)十くはふ(交わす)／性行為は目と目を見つめ合うところからはじまるという考え方／問ふこと(コミュニケーション)／神もそうであった／だから人もそうなのだ

三、死の起源

ここにその妹(いも)伊邪那美(いざなみの)命(みこと)を相見まくおもほして、黄泉国(よもつくに)に追ひ往(い)でましき。ここに殿の藤(くみ)戸より出で向(た)まふ時に、伊邪那岐(いざなぎ)の命語らひ

て詔(の)りたまひしく、「愛(うつく)しき我(あ)が汝妹(なにも)の命、吾と汝と作れる国、いまだ作り竟(を)へずあれば、還りまさね」と詔りたまひき。ここに伊邪那美の命の答へたまはく、「悔(くや)しかも、速(と)く来ます。吾は黄泉戸(よもつへぐひ)しつ。然れども愛(うつく)しき我が汝兄(なせ)の命、入り来ませること恐(かしこ)し。かれ還りなむを。しまらく黄泉神(よもつかみ)と論(あげつら)はむ。我(あ)をな視たまひそ。」と、かく白(まを)して、その殿内(とのぬち)に還り入りませるほど、いと久しくて待ちかねたまひき。かれ左の御鬘髻(みみづら)に刺せる湯津爪櫛(ゆつつまぐし)の男柱(ほとりは)一箇(ひとつ)取り闕(か)きて、一つ火燭(とも)して入り見たまふ時に、蛆(うじ)たかれころろきて、頭には大雷(おほいかづち)居(を)り、胸には火(ほ)の雷居り、腹には黒雷居り、陰(ほと)には析雷(さくいかづち)居り、左の手には若雷(わきいかづち)居り、右の手には土雷(つちいかづち)居り、左の足には鳴雷(なるいかづち)居り、右の足には伏雷(ふしかづち)居り、并はせて八くさの雷神成り居りき。

ここに伊邪那岐の命、見(み)畏(かしこ)みて逃げ還りたまふ時に、その妹伊邪那美の命、「吾に辱(はぢ)見せつ」と言ひて、すなはち、黄泉醜女(よもつしこめ)を遣して追はしめき。ここに伊邪那岐の命、黒御縷(くろみかつら)を投げ棄(う)てたまひしかば、すなはち蒲子(えびかづら)生(な)りき。こを撫(ひり)ひ食(は)む間に逃げ行(い)てますを、なほ追ひしかば、またその右の御髻に刺せる湯津爪櫛を引き闕きて投げ棄(う)てたまへば、すなはち笋(たかむな)生(な)りき。こを抜き食(は)む間に、逃げ行でましき。また後(のち)にはかの八くさの雷神に、千五百(ちいほ)の黄泉軍(よもついくさ)を副(たぐ)へて追はしめき。ここに御佩(みはかし)の十拳(とつか)の剣(つるぎ)を抜き、後手(しりへ)に振(ふ)きつつ逃げ来ませるを、なほ追ひて黄泉比良坂(よもつひらさか)の坂本に到る時に、その坂本なる桃の子(み)三つをとりて待ち撃(う)ちたまひしかば、悉に振(ひ)き返りき。ここに伊邪那岐の命、桃の子(み)に告(の)りたまはく、「汝(いまし)、吾を助けしがごと、葦原(あしはら)の中つ国にあらゆる現(うつ)しき青人草(あをひとくさ)の、苦(う)き瀬に落ちて、患惚(たしな)まむ時

に助けてよ」とのりたまひて、意富加牟豆美(おほかむづみ)の命といふ名を賜ひき。最後(いやはて)にその妹伊邪那美の命、身みづから追ひ来ましき。ここに千引(ちびき)の石(いは)をその黄泉比良坂に引き塞(さ)へて、その石を中に置きて、おのおの対(む)き立たして、事戸(ことど)を度(わた)す時に、伊邪那美の命のりたまはく、「愛(うつく)しき我(あ)が汝兄(なせ)の命、かくしたまはば、汝(いまし)の国の人草、一日(ひとひ)に千頭(ちかしら)絞(くび)り殺さむ」とのりたまひき。ここに伊邪那岐の命、詔(の)りたまはく、「愛(うつく)しき我が汝妹(なにも)の命、汝(いまし)然したまはば、吾(あ)は一日に千五百(ちいほ)の産屋(うぶや)を立てむ」とのりたまひき。こを以ちて一日にかならず千人(ちたり)死に、一日にかならず千五百人(ちいほたり)なも生まるる。

かれその伊邪那美の命に号(なづ)けて黄泉津大神(よもつおほかみ)といふ。また、その追ひ及(し)きしをもちて、道敷(ちしき)の大神(おほかみ)ともいへり。またその黄泉(よみ)の坂に塞(さは)れる石は、道反(ちかへし)の大神(おほかみ)ともいひ、塞(さ)へます黄泉戸の大神ともいふ。かれそのいはゆる黄泉比良坂は、今、出雲の国の伊賦夜坂(いふやさか)といふ。『古事記』上巻、黄泉行神話

死の不可避性を知らせる／生あれば死あり／愛する者も憎しみ合うということ
を知らせる／有限なる生Ⅱ生命を繋ぐ性／生殖と死の起源がセツト
おわりに

お寺の花子さん
お寺の花子さん
種まいて 種まいて
目が出て膨らんで 花が咲いて しぼんだ

種なる日／蕾となる日／花開くとき／しぼむ時／東洋的生死観／現場の先生の
苦勞や如何／その時に、どう生徒と向き合うことができるのか／今、私たちは